技術者からの視点

●第32回●

リングワ・フランカと印刷機

藍野大学非常勤講師　木下　親郎

世界史における「国際共通語」の変遷

「リングワ・フランカ」は、イタリア語の「フランク族の言葉」で、ギリシャからエジプトまでの地中海沿岸地方（レバント）で使われたイタリア語、フランス語、ギリシャ語、スペイン語、アラビア語の混成語の事であった。現在では「国際共通語」という意味で使われている。紀元前4世紀にギリシャからエジプト、ペルシャまでを征服したアレキサンダー大王の支配下の国ではギリシャ語がリングワ・フランカであり、西はヨーロッパ大陸からイギリス、東は中東からエジプトを支配したローマ帝国の時代には、ラテン語がリングワ・フランカになった。ラテン語はルネッサンス、宗教改革までヨーロッパのリングワ・フランカであった。15世紀のポルトガルのエンリケ航海王子による大航海時代のブラジル、アフリカ、インド、インドネシアや極東の沿海部では、ポルトガル語がリングワ・フランカになった。

太陽王と言われたフランスのルイ14世以降、フランス語がヨーロッパのリングワ・フランカになったが、フランス語の優位は、皮肉なことにルイ14世が造ったベルサイユ宮殿での1919年の第1次世界大戦講和条約で終わった。英米の強い主張により、英語がフランス語と並んで条約の正文となったのである。現在の国連公用語は英・露・中・仏・アラビア・スペインの6カ国語と決められているが、英語がリングワ・フランカであろう。

印刷機がヨーロッパの言語に与えた影響

技術者として興味深いのは、印刷機が、ラテン語のヨーロッパにおけるリングワ・フランカの地位を失わせたことである。印刷技術は中国の発明であり、現存する世界最古の印刷物は、8世紀に造られた法隆寺が保存する「百万塔陀羅尼」と言われる。ヨーロッパには15世紀に伝わり、1450年のドイツ人グーテンベルクによる聖書の印刷が、機械的な印刷の始まりである。印刷機による書物の数は急速に増え、15世紀末にはヨーロッパ人口の20パーセントに相当する2000万冊になったという。ドイツ語での最初の出版は、1517年のマルティン・ルターがラテン語から翻訳した聖書である。ルターの聖書によって、多くの人が聖書をドイツ語で知ることができるようになった。ルターは精力的にドイツ語での出版を行い、彼の説く言葉は、印刷技術とともに、ドイツ語圏で急速に拡がり宗教改革の原動力となる。当時、カトリック教会と学者の世界でのリングワ・フランカはラテン語であったが、学者達の母国語での出版が始まり、多くの国の教養人達が、ラテン語を介さずとも知識を共有することができるよ

うになった。

大量印刷技術の威力で標準英語が浸透した

現在のリングワ・フランカである英語を作ったのも印刷機と言えよう。英国で印刷を始めたのは、ウイリアム・カックストンである。私は、ロンドンへ出張したさい、ウエストミンスターのスコットランドヤードの裏手、カックストンストリートにある客の事務所へよく行ったが、そこでカックストンが、英国人が誇りとする人物の名前であることを知った。カックストンはベルギーで印刷機に出会い、ドイツに出かけて印刷技術を習得し、英国に印刷機を持ち帰って、1475年にウエストミンスターで出版事業を始めた。当時の英国は、宮廷ではフランス語が使われ、教会や学者はラテン語を用い、民衆は地方ごとに異なる方言を喋った。カックストンは民衆の言葉にこだわり、自ら翻訳、校訂、出版を行った。最初の本格的出版は、ロンドン周辺の方言を使ったチョーサーの「カンタベリー物語」である。大量印刷技術の威力は絶大で、カックストンの選んだ言葉が標準英語に成長していった。彼が英語方言での出版にこだわったのは、ラテン語書籍の出版では、欧州大陸の大手出版業者と競合できないという商売上の判断にあったようだ。カックストンの商才がなければ、現在の英語はどのようなものになったのだろうかと思うことがある。ちなみに、ラテン語で出版された最後の学術書はニュートンの「プリンキピア（諸原理）」（1687年）といわれている。

外国語習得は短期集中型が効果的

さて、日本語は国際語の中でどのような位置を占めるのであろうか。日本の人口はドイツ、フランスよりも多いが、その言語を母語（第1言語）あるいは第2言語として使う人口では、ドイツ語、フランス語に追い越されている。インターネットの世界は、英語で始まり、現在では英語以外の言葉が過半数になりそうだが、それでも、政治、経済、学術の場では、英語がリングワ・フランカの地位を占めている。日本語の比率は少なくなる一方である。ヨーロッパでは、英語を含む2カ国語を自由に話す人（バイリンガル）が多く、日本人も国際的な場ではバイリンガルが必要だ。当然のことだが、バイリンガルは母国語を熟知していなければならない。

文部科学省は小学校5、6年での外国語学習について「音声を中心に外国語に慣れ親しませる活動を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める」と謳っている。欧米の旧植民地における第2言語教育のように、第2言語以外を使わせないような教育はできないので、長い時間を費やした外国語学習が、植民地の住民が話すピジンの習得程度にとどまるおそれがある。外国語習得は短期集中型教育、住込み外人家庭教師、外国への短期留学が世界の常識である。私も、大学1年生で受けた厳しいドイツ語教育が、トーマス・マンの小説や、ドイツ語技術論文を読み、ドイツ人との会話を可能にさせた体験を持つ。バイリンガルへの理想的な路は、小学校から日本文化と日本語による表現を学び、できるだけ幼い時に、日本語と印欧語の発音の違いを体得し、そして、必要な時期になってから短期集中的な外国語教育を行うことと思っている。

P23のクロスワードの解答

1 テ	イ	2 キ	ア	3 ツ	■	4 サ
ブ	■	チ	■	5 ブ	6 レ	イ
7 ク	ジ	ヨ	8 ウ C	■	9 イ	フ D
ロ	■	10 ウ	イ	ツ	ト	■
■	11 ロ B	メ	ン	■	12 ウ	13 シ E
14 ガ	ラ	ン	ド	15 ウ	■	カ
16 フ A	ン	■	17 ウ	ン	チ	ク

フ	A
ロ	B
ウ	C
フ	D
シ	E